

ヒャルチベット語松潘・山巴 [sKyangtshang] 方言における *snang* の用法

鈴木博之 供邱澤仁

[要旨] 本稿では、中国四川省松潘県で話されるヒャルチベット語山巴 [sKyangtshang] 方言における述語動詞^hnoŋ (蔵文 *snang*) の名詞述語としての用法を記述する。この方言では、^hnoŋ は joʔ (蔵文 *yod*) とともに主に「存在・所有」を表すが、その用法の差異は人称による一定の基準が見られるほか、発話者の発話に対する客観性・確信性が反映されているのを認めることができる。

1 はじめに

チベット語について

チベット語はチベット・ビルマ諸語の中で最も広い地域で話される言語で、方言差異が非常に大きい言語でもある。本稿で扱う方言は中国四川省北部に分布しているが、同地域はチベット語分布地域の東端にあたり、さまざまな民族と言語が分布する川西民族走廊に含まれる地域でもある。



この地域のチベット語方言はきわめて多様である。その一方で、これまでの調査研究で調査された方言分布地点は決して多くなく、Zhang (1996) に挙がっている地点を見ても 20 数ヶ所にとどまる。その中で詳細な記述研究が行われているのは数種の方言のみであり、未記述の方言はきわめて多い。そのため、この地域のチベット語方言の全容は今なお完全には把握されていない。

筆者は現地調査を通じて、現在のところ川西民族走廊のチベット語はカムチベット語、アムドチベット語、ヒャルチベット語の 3 つの大方言群に分かれ、それぞれの下位区分に多数の方言が含まれることを明らかにした。そのうち本稿で扱うヒャルチベット語の分布域は上図のように、四川省の北部の一角である。(灰色部分は阿壩藏族羌族自治州)。また、筆者の最新の方言分類は Suzuki (2009) に提示されている。

また、チベット語には文語 (蔵文) がある。文語と口語 (方言) との異なりは激しいが、口語で用いられる語彙の相当数は、その形式において文語と対応する。

snang について

チベット文語において、*snang ba* は「現れる」という語義の動詞である。しかし川西民族走廊に分布するチベット語諸方言においては、本来の動詞とは異なる用法が見られ、しかも地域によって意味・用法が異なっている。この場合 *snang* として現れ、述語動詞¹として用いられる。この *snang* については鈴木 (2006) において概略的な用法の素描とともに紹介され、主に以下の3つの方言グループでの用法が示された。

1. 北部：松潘県・九寨溝県・若爾蓋県東部 (= ヒヤルチベット語²)
十里高屯子 [Ketshal] 方言、十里大屯 [Thangskya] 方言、山巴 [sKyangtshang] 方言、樹正 [Phyugtsi] 方言、阿西茸 [Askyirong] 方言など
用法：所有・存在を表す述語動詞
2. 中部：丹巴県 (= カムチベット語二十四村方言³)
梭坡 [Sogpho] 方言、格宗 [dGudzong] 方言など
用法：確認性・推測を表す述語動詞
3. 南部：甘孜州南西部・迪慶州 (= カムチベット語南路次方言⁴)
巴迪 [Budy] 方言、尼西 [Nyishe] 方言、香格里拉 [rGyalthang] 方言、沙貢 [Sagong] 方言、稻城 [nDappa] 方言、巴塘 [mBathang] 方言、理塘 [Lithang] 方言など
用法：所有・存在を表す述語動詞、語気助辞

これら3グループは地理的に連続でなく、互いに相当異なる方言が用いられており、*snang* の用法も全て異なる。各グループ内では、おおむね *snang* の用法は似通っている⁵。

このような *snang* については Tournadre (2005:46, 2008) でも紹介されたが、そこではこれに対応する口語形式を用いる方言があると示されただけで、具体的な方言名や機能については紹介されていない。また、鈴木 (2006) の示したのは概況であって、1つの方言における *snang* の用法を記述したものではない。述語動詞として機能する *snang* の存在はこれまでの報告において散見されるが、その具体的な用法を記述しているものはきわめて少ない⁶。た

¹動詞の分類・名称は星 (2003) を参考にしている。本稿2節を参照。

²旧来の見解はアムドチベット語ともカムチベット語とも言われているが、筆者の見解はこれらのどちらでもない異なる方言群とする。詳細は Suzuki (2008) 参照。

³ギャロン (rGyalrong) を自称するチベット人が話す特徴的なカムチベット語である。

⁴格桑居冕・格桑央京 (2002) の分類名称。現在の筆者の見解では系統的に複数の方言群からなる。詳細は鈴木 (forthcoming) 参照。

⁵以上に述べた範囲外で、*snang* の用法を記述しているものに華侃・龍博甲 (1993:326) と耿顯宗等編 (2006:479) がある。これらには dPari (天祝) 方言について *snang* が存在の意味で用いられることが記述されている。前者は *snang* を、後者は *snang gi* を見出し語としている。dPari 方言はアムドチベット語牧民方言の一種であり、甘肅省天祝藏族自治州で話される。同地は川西民族走廊の北側に位置する。

⁶格桑居冕・格桑央京 (2002:87, 89) に mBathang 方言の *snang* の例が記載されている。また、gTorwa (東旺) 方言における *snang* 対応形式は “imperfective visual evidential” として用いられると Bartee (2007:369-370) が記述している。

だし、口語形式も反映されている辞書 *Les Missionnaires Catholiques du Thibet* (1899:579) が *snang* について記述している。これについては次節で扱う。

本稿では、鈴木(2006)の北部グループに含まれる、ヒャルチベット語の山巴 [sKyangtshang⁷] 方言を取り上げ、同方言における *snang* の述語動詞としての用法を記述する⁸。

2 チベット語の述語動詞

2.1 述語動詞の定義

チベット語 Lhasa (ラサ) 方言を扱う星 (2003:5) は、Lhasa 方言の動詞についてその機能から述語動詞と本動詞⁹に分けられるとし、述語動詞を「文を終止し、述語を形成することのできる文法化した動詞」と述べ、名詞述語、形容詞述語、動詞述語の3種を挙げている。また、星 (2003:6-41) における用法の解説では「名詞述語・形容詞述語」と「動詞述語」に二分して記述している。この分析は sKyangtshang 方言にも当てはまると考えられる。

さて、星 (2003:5) には Lhasa 方言の述語動詞の主な形式が挙がっている。sKyangtshang 方言における *snang* は、3節で詳しく見るように「存在・所有」を表す述語動詞であるが、Lhasa 方言には *yod*, *yog red*, *'dug* が「存在・存続」を表す述語動詞とされている。この3種の使い分けと互いに関連する述語動詞に「確定判断」を表すものがあり、それには *yin*, *red* の2種がある。sKyangtshang 方言にも *yin*, *red* それぞれに対応する口語形式が存在し、それらは判断を表すことに変わりはないが、その使い分けは Lhasa 方言と似ているか異なっているかはまだ断定的なことはいえない。sKyangtshang 方言では、*snang* の同様「存在・所有」を表す述語動詞に *yod* があるほか、*snang gi* という接辞を伴うものもある。

本稿では sKyangtshang 方言の *snang* について「名詞述語・形容詞述語」の「名詞述語」用法にしばって記述し、「形容詞述語」「動詞述語」の場合は扱わない。

2.2 述語動詞としての *snang* の記述

ここでは、述語動詞としての *snang* を記述している先述の *Les Missionnaires Catholiques du Thibet* (1899:579) の記述を整理しておく。当該文献には、*snang* の語釈として “in E. sæpe dicitur pro : Esse, existere, habere” (E (= チベット語分布地域東部¹⁰) では、「である」「存在

⁷ 方言名はすべてチベット文字を基本とするローマ字表記で示す。なお、sKyangtshang の現地音は [°]coŋ ts^hoŋ/となる。なお、本文付録に sKyangtshang 方言の音体系を掲げた。本文中の言語資料の表記はそこに示される音標文字による。

⁸ 方言の形式を取り上げる際には、例文では音標文字を用いるが、説明の際には対応する蔵文の Wylie 転写形式で示す。

⁹ 「本動詞」の指すものは、星 (2003:42) において「事物の動作、作用、状態、変化などを表す動詞で、本動詞 (+ 接辞) + 述語動詞という形で動詞述語を形成する」とある。述語動詞と本動詞という分類はそのまま sKyangtshang 方言のみならずヒャルチベット語全体にも適用できると考えられる。

¹⁰ おそらくこれは、鈴木 (2006) で南部とまとめた地域の方言と関連のある方言群についての言及であると推測される。

する」「持っている」としてしばしば用いられる)とあり、以下のような例文が収められている¹¹。

a snang
疑問 snang
彼はそこにいますか？/それはそこにありますか？

mi snang
否定 snang
彼はそこにいません。/それはそこにはありません。

mi mang po snang
人 多い snang
人がたくさんいます。

phyug po snang
裕福な snang
彼は裕福です。

ga snang
どこ snang
彼はどこにいますか？

bod yul la snang
チベット地域 位格 snang
彼はチベットに(住んで)います。

以上の例文は、鈴木(2006)で扱った南部のチベット語諸方言の用法に酷似している。ただし南部の諸方言では、有生物に対して *snang* が用いられる方言とそうでない方言がある点に注意が必要であるが、以上の例文には主語が明示されていないため、有生物か無生物かは判断しかねるものもある。

3 sKyangtshang 方言における *snang*

ここでは、sKyangtshang 方言における存在・所有の意味を表す述語動詞 *snang* の用法を具体的に記述する。まず *snang* の現れる例を掲げ、その後 *snang gi*、*yod* との用法の異同を考察する。

¹¹以下の例文は Les Missionnaires Catholiques du Thibet (1899:579) 中の例文は蔵文表記であり、その転写形式を掲げる。例文に対する訳文は同文献中のラテン語・フランス語に合わせる。グロスは筆者が与え、その際の *italic* 表示は蔵文形式をそのまま示している。また、これらの例文は全て *snang* が「名詞述語・形容詞述語」として用いられている。「動詞述語」の例は挙がっていない。

3.1 *snang* の具体例

まず、*snang* の用法を具体例を通して見る。sKyangtshang 方言において、*snang* は^{°h}nɔŋ/ という音形式で記述されるが、音声学的には [^hnɔŋ, nɔŋ, ^hnəŋ, nəŋ, nɔ:] といった変異がある。以下、記述の際はすべて^{°h}nɔŋ で統一する。

k^ho ˚ɕ^hə nə ˚h[°]nɔŋ gə
彼 家 中 *snang gi*
彼は家の中にいます。

k^ho ɣə [tə tɕ^hoŋ ˚ʔə ˚h[°]nɔŋ
彼 与格 ナイフ 疑問 *snang*
彼はナイフを持っていますか？

k^ho kɔŋ du ˚h[°]nɔŋ gə
彼 どこ *snang gi*
彼はどこにいますか。

k^ho ˚ɕ^hə nə mə ˚h[°]nɔŋ
彼 家 中 否定 *snang*
彼は家の中にいません。

tɕõ[°]dzə ɣə tɕa ˚h[°]nɔŋ gə
コップ 与格 茶 *snang gi*
コップにお茶があります（入っている）。

以上の例に見えるように、*snang* は基本的な用法として存在・所有の意味を表しているものと考えられる¹²。また、平叙文および疑問詞疑問文では *snang* に小辞 *gi* が常に後続する。

k^ho ˚ɕ^hə nə {˚h[°]nɔŋ gə / *˚h[°]nɔŋ}
彼 家 中 *snang gi / snang*
彼は家の中にいます。

逆に、否定辞や疑問助詞が *snang* に前接する場合、小辞 *gi* は共起しない。

k^ho ɣə [tə tɕ^hoŋ ˚ʔə {˚h[°]nɔŋ / *˚h[°]nɔŋ gə}
彼 与格 ナイフ 疑問 *snang / snang gi*
彼はナイフを持っていますか？

¹²所有の意味を担う場合、所有者は与格標識を伴って現れる。与格標識の形式には $\gamma\text{ə}$ と γe の2種がある。

上に示した具体例から考えると、*snang* の用法に関して次のようなことがいえる。

1. 3人称について言及するときに用いられる。
2. 平叙・否定・疑問文のいずれにも用いられる。
3. 平叙文および疑問詞疑問文の場合、*snang* は小辞 *gi* を伴って用いられる。
4. 有生物・無生物を基準とした用法の差異は見られない。

以上の2. と3. の特徴について整理すると、以下のようになる。

文の種類	前接語	<i>snang</i>
平叙文		<i>snang + gi</i>
否定文	/mə/ +	<i>snang</i>
諾否疑問文	/ʔə/ +	<i>snang</i>
疑問詞疑問文		<i>snang + gi</i>

動詞の前接語と後置される小辞 *gi* とは相補分布の関係にあるといえ、*snang* のみが単独で現れることはほばないといえる。

3.2 存在・所有を表す *snang* と *yod*

sKyangtshang 方言において、所有・存在を表す述語動詞には *snang* とともに *yod*¹³がある。それでは、これら両者の間にある用法の差異は何であるのか、考察の必要がある。

yod が用いられる例には、以下のようなものがある。

ŋa ʔ^hə nə joʔ
私 家 中 *yod*
私は家の中にいます。

tʂ^həʔ ɣə [ə tʂ^hoŋ ʔə joʔ
あなた 与格 ナイフ 疑問 *yod*
あなたはナイフを持っていますか？

ŋa ɣə ni wo ^htsə joʔ
私 与格 弟 1 *yod*
私には弟が1人います。

¹³*yod* の口語音形式としては [jəʔ] と [joʔ] があり、話者によって異なる。本稿ではすべて joʔ で統一する。

上例に見えるように、*yod* は *snang* と違って平叙文でも小辞 *gi* を伴わない。この点は両者が文を構成する上で大きな差異と判断できる。

なお、2人称がかかわる平叙文では、*yod* で文を終止させると非文ではなくとも「すわりが悪い」と判断される。そのため、以下のように *yod* に小辞 *li:* (確認・念押しの意を表す) が後続すると発話が自然と判断される。

tɕʰəʔ ʰɕʰə nə joʔ li:
あなた 家 中 *yod* 小辞
あなたは家の中にいるよね。

以上の例における *yod* は、確かに *snang* と人称の面において相補分布しているように見える¹⁴。

しかしながらそうではない例が確認され、以下の2例は1人称にかかわる発話において *yod* か *snang* かどちらを用いるかで表す意味が異なる。

ŋa γə [ə tɕʰoŋ] ʰtsə joʔ
私 与格 ナイフ 1 *yod*
私はナイフを1本持っています(が、今手元にない)。

ŋa γə [ə tɕʰoŋ] ʰtsə ʰnɔŋ gə
私 与格 ナイフ 1 *snang gi*
私はナイフを1本持っています(ここにある)。

上の例は、*joʔ* は客観的な所有の意味を述べているのに対し、*ʰnɔŋ* は今の状態について述べている。これは疑問文にすれば語用論的により異なった意味を持ち、すなわち *ʰnɔŋ* を用いた疑問文は「もっていたら今貸してくれないか」ということを言外に意味することが状況によっては出てくるとい¹⁵。なお、以上の2例は否定文でもそれぞれ対応する表現がある。

ŋa γə [ə tɕʰoŋ] ʰtsə meʔ
私 与格 ナイフ 1 *med*
私はナイフを1本持っていません(事実として持っていない)。

¹⁴なお、*yod* の否定は否定辞を用いず、存在の否定を表す動詞/meʔ/ (蔵文 *med*、以下本文・グロスでも *med* と表記) が *yod* と置き換わって用いられる。出現条件は *yod* に準じると見られ、上述の例の否定はたとえば以下ようになる。

ŋa ʰɕʰə nə meʔ
私 家 中 *med*
私は家の中にいません。

¹⁵ただしこの解釈は母語話者の間でも分かれる。

ɲa ɣə t̚ə t̚ə^hoŋ ^htsə mə ^hnoŋ
 私 与格 ナイフ 1 否定 *snang*
 私はナイフを1本持っていません(今、手元には見当たらない)。

通常1人称がかかわる文では、否定文の場合 *med* が用いられる。特に *snang* の否定形が用いられるときは、話者の頭の中に「持っているはずだが見当たらない」という意識があるという。

これについて3人称に関する言及では、意味的に話者の発話に対する確信度に反映されることがある。

ʔk^ho: ɣəʔ nɛ ^hp^haɬ ^hnoŋ gə
 家 下 助詞 ぶた *snang gi*
 家の下にぶたがいます(知っている)。

ʔk^ho: ɣəʔ nɛ ^hp^haɬ joʔ ^hdzə reʔ
 家 下 助詞 ぶた *yod* 小辞 *red*
 家の下にぶたがいます(鳴き声がするからそのように思う)。

すなわち、*snang* は発話者が既知のことを述べているのに対し、*yod* は状況から判断した言及になる¹⁶。なお、以上の例に対する否定文は *snang* の否定が用いられる¹⁷。

3.3 考察

これまでに示したことから、*snang* と *yod* は主として人称による用法の違いが明確に現れることが分かる。しかしながら、3人称に関する言及については evidentiality の若干の関与を認めることができる。ただし注意が必要なのは、3人称に関する言及における2つの述語動詞の使い分けは必ずしも話者によって解釈が一致しないことがある点であるが、この問題は今後の課題とする。

また、*snang* と *yod* の使用について、話者間で容認度に差が生まれることもある。以上に示した例文の判断において、話者は *snang* と *yod* を例文中に示した用法と逆に用いても、それがただちに非文になるとは判断しない。それはおそらくこの両者の選択が文法的に決まっているからではないため、それは逆に言うと人称にかかわらず状況を設定すれば両方が容認される文になりうるということも考えられる。話者が明確に非文と判断するのは、たとえば *yod* に小辞 *gi* を後続させた場合などである。しかしこれは言語学的には問題である。同じ述語動詞の範疇にあると考えられる *snang* と *yod* が、文末小辞 *gi* の現れの点において文法的に異なる判断を下されるからである。しかしながら、この説明には未だ至っていない。

¹⁶ *yod* に後続する /^hdzə reʔ/ は、本動詞に後続してこれからなされる動作を表すときに用いられる確定判断を表す述語動詞と同じ形態である。なお、/^hdzə reʔ/ は *snang* には後続しない。

¹⁷ *med* も容認される文脈はあると考えられるが、まだ見つかっていない。

4 まとめ

本稿では sKyangtshang 方言の述語動詞 *snang* の用法について記述を試みた。その際、もう1つの述語動詞 *yod* の現れも調べ、基本的な *snang* の用法を明らかにすることができた。

ただし現段階では *snang* の用法の記述にはなお多くの疑問点を含んでいる。まず、特定の発話状況を設定すると、話者によって *snang* と *yod* のどちらを用いるかに判断にゆれがあること、そして述語動詞として *snang* と *yod* の周辺要素の振る舞いが異なる¹⁸こと、などが挙げられる。一方、文脈の設定によっては本稿で述べた例以外の用法も容認される可能性がある。引き続き分析を行う必要がある。

付録：sKyangtshang 方言の音体系

超分節音 レジスター2種が認められる

緊張性（°で示す）と弛緩性（無標）の2項対立

母音 以下の各要素について、長/短および鼻母音/非鼻母音の対立がある

i	u	ɯ u
e	ə ə	o
ɛ		ɔ
a	ɑ	

子音 子音連続の構成要素としてのみ現れるものも含めた一覧

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	口蓋垂	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h		k ^h	q ^h	
	無声無気	p	t	t		k		ʔ
	有声	b	d	d̪		g		
破擦音	無声有気		ts ^h		tɕ ^h			
	無声無気		ts		tɕ			
	有声		dz		dʒ			
摩擦音	無声有気		s ^h		ɕ ^h	fj ^h / x ^h		
	無声	ɸ	s	ɕ	ɕ	x	χ	h
	有声		z		ʒ	ɣ	ʁ	ʕ / fi
鼻音	有声	m	n		ɲ	ŋ		
流音	有声		l, r					
半母音		w			j			

子音連続として、主に前鼻音と前気音が見られる。

¹⁸その一方で、*yod* とその否定 *med* の周辺要素は互いに振る舞いが酷似している。

参考文献

- 鈴木博之 (2006) 「川西民族走廊・チベット語諸方言における *snang* の意味」第 9 回チベット = ビルマ言語学研究会発表資料
- (forthcoming) 川西地区“九香線”上の藏語方言：分布與分類 《漢藏語學報》第 3 期
- 星泉 (2003) 『現代チベット語動詞辞典 (ラサ方言)』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- Bartee, Ellen Lynn (2007) *A Grammar of Dongwang Tibetan*, doctoral dissertation, University of California at Santa Barbara
- Les Missionnaires Catholiques du Thibet (1899) *Dictionnaire thibétain-latin-français*, Imprimerie de la Société des Missions Étrangères
- Suzuki, Hiroyuki (2008) Nouveau regard sur les dialectes tibétains à l'est d'Aba : phonétique et classification du dialecte de Sharkhog [Songpan-Jiuzhaigou], in : *Linguistics in Tibeto-Burman Area* Vol. 31.1, 85-108
- (2009) Introduction to the method of the Tibetan linguistic geography —— a case study in the Ethnic Corridor of West Sichuan ——, in : Yasuhiko Nagano (ed.) *Linguistic Substratum in Tibet —— New Perspective towards Historical Methodology (No. 16102001) Report* Vol.3, 15-34
- Tournadre, Nicolas (2005) L'aire linguistique tibétaine et ses divers dialectes, in : *Lalies* 25, 7-56
- (2008) *The Notion of Scale in Linguistic Classification: Is “Tibetan” a Language or a Family of Languages?*, unpublished manuscript presented at 14th HLS (Göteborg)
- 耿顯宗等編 (2006) 《安多藏語口語詞典 [a mdo'i kha skad tshig mdzod]》甘肅民族出版社
- 華侃・龍博甲 [Klu-'bum-rgyal] 編 (1993) 《安多藏語口語詞典 [bod-rgya shan-sbyar gyi a mdo'i kha-skad tshig-mdzod]》甘肅民族出版社
- 格桑居冕 [sKal-bzang 'Gyur-med]・格桑央京 [sKal-bzang dByangs-can] (2002) 《藏語方言概論》民族出版社

[付記]

筆者による現地調査については、平成 16–20 年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究(S)「チベット文化圏における言語基層の解明」(研究代表者：長野泰彦、課題番号 16102001) および平成 19–20 年度日本学術振興会科学研究費補助金(特別研究員奨励費)「川西民族走廊・チベット文化圏における少数民族言語の方言調査と地域言語学的研究」の援助を受けている。